高岡市埋蔵文化財調査概報第31冊

高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅶ

—平成７年度，野村・横田地区他の遺跡分布調査—

1996年３月

高岡市教育委員会

例　言

1．本書は、富山県高岡市における埋蔵文化財分布調査の概要報告書である。

2．当調査は、平成７年度の国庫補助金の交付を受けて、高岡市教育委員会文化財課が実施した。

3．調査対象地は、高岡市内、旧市北部地域の内、野村・横田地区他である。

4．現地調査は、平成７年４月10日から同年12月13日までの実働26日である。

5．調査関係者は、次のとおりである。

文化財課長；田村晴彦

〔埋蔵文化財係〕

主幹兼係長；石浦正雄

係員；山口辰一

係員；根津明義

係員；荒井　隆

6．調査及び報告書の作成に当たり、以下の各氏から指導・援助を得た。

（順不同・敬称略）

小島俊彰（高岡市文化財保護審議委員）

西井龍儀（富山考古学会）

林寺厳州（富山考古学会）

7．本書の執筆は山口が担当した。

凡　例

遺跡、埋蔵文化財包蔵地

▼　弥生・古墳時代遺物採集地点

▲　古代遺物採集地点

●　中世遺物採集地点

■　近世遺物採集地点

調査参加者名簿

現地調査

小竹由紀子、尾山久美子、垣地慶子、門島信也、新谷晴紀子、旅剛、塚原望

寺井久子、土合良子、道谷美奈子、中村恭子、宮下奈津子

整理

高田えみ子、道谷美奈子、橋真理子

目　　次

例　言
目　次

Ⅰ　序　　説 …… 1

Ⅱ　遺跡各説 …… 4

Ⅲ　結　　語 …… 12

挿　図　目　次

第１図　調査対象地区分図（１／10万） …… 2
第２図　調査対象地位置図（１／５万） …… 3
第３図　江尻Ａ遺跡出土土器実測図（１／３） …… 4
第４図　江尻南遺跡出土石鏃実測図（実大） …… 5
第５図　高岡台地地区遺跡地図（１／7,500） …… 8
第６図　波岡地区出土土器実測図（１／３） …… 10

付　表　目　次

付表１　遺跡新旧対照表 …… 12
付表２　遺跡一覧表 …… 13

図　面　目　次

図面１　遺跡地図　全体図　　（１／２万５千）
図面２　遺跡地図　部分図〔１〕（１／１万５千）
図面３　遺跡地図　部分図〔２〕（１／１万５千）
図面４　遺跡地図　部分図〔３〕（１／１万５千）

図　版　目　次

図版１　遺跡　１．江尻Ａ遺跡（北）
２．江尻Ａ遺跡（南）
３．江尻Ｃ遺跡（西）
図版２　遺跡　１．江尻南遺跡（北東）
２．江尻南遺跡（南）
３．向野本町遺跡（西）
図版３　遺跡　１．下石瀬遺跡（南東）
２．蓮花寺遺跡（北西）
３．蓮花寺遺跡（南東）
図版４　遺跡　１．入定塚遺跡（西）
２．入定塚遺跡（南）
３．中川遺跡（西）
図版５　遺跡　１．小竹藪遺跡（東）
２．高岡城跡（西）
３．大手口遺跡（北東）
図版６　遺跡　１．波岡北遺跡（北）
２．波岡北遺跡（南）
３．波岡東遺跡（北）
図版７　遺跡　１．波岡南遺跡（南）
２．波岡西遺跡（東）
３．瑞穂町遺跡（南西）
図版８　遺物　１．江尻南遺跡出土縄文土器
２．江尻南遺跡出土縄文土器

Ⅰ 序　説

高岡市の位置

高岡市は富山県の北西寄りに位置する。北側は富山湾に臨む。東側は新湊市・大島町・大門町・小杉町と、南側は砺波市・福岡町と接する。また北側は、能登半島の基部東側を占める氷見市である。市域の大部分は、庄川と小矢部川の２大水系によって形成された沖積平野である。これらは、庄川による沖積扇状地部分と、庄川と小矢部川による沖積低地部分とに大別される。砺波平野の北半部と射水平野の西端部に当たる。一方北西部には、西山丘陵と、これに続く二上丘陵が走っている。

西山丘陵埋蔵文化財分布調査

小矢部川左岸一帯の西山・二上地域（西山丘陵・二上丘陵とその周辺の平野部）は、多くの遺跡（埋蔵文化財包蔵地）の所在地として知られていた。昭和50年代に入り開発工事や、開発計画が増大し、西山・二上地域での発掘調査が実施された。当地域に対する各種の開発行為が進むと共に、高岡市は、西山地区での総合開発を検討していた。このような状況の中で、当地域における遺跡の分布状況や内容の把握が、埋蔵文化財の保護上急務となってきた。以上のことから、高岡市教育委員会では、昭和58年度～昭和62年度の５箇年に亘り、国庫補助を得て「西山丘陵遺跡分布調査事業」を実施するに至った。その成果は各年度ごとに『西山丘陵埋蔵文化財分布調査概報』Ⅰ～Ⅴとして刊行している。

高岡市埋蔵文化財分布調査

高岡市は面積15,000haを計る。この内約6,000haは、前述の通り西山丘陵分布調査として、分布調査が完了している地域である。平野部が主体を占める残りの9,000haの地域でも、数々の遺跡が存在し、数々の開発工事がなされている。このため、西山丘陵地域につづいて、この地域でも国庫補助を得て、分布調査を実施することに至った。

広い地域であるので、３つの地域に大別した。市域の南部に当たる旧戸出町・旧中田町を１つの地域、そして残りの地域は昭和30年以前に合併した町・村よりなるので、これをＪＲ高岡駅付近を基準に南北に分け旧市南部地域、旧市北部地域と称することにした。それぞれの地域はすべて面積約3,000haを計るものである。そして「旧市南部地域」「旧市北部地域」「戸出・中田地域」の順で調査実施することになった。

旧市南部地域の調査は、平成元年度～平成５年度に実施した。この成果は『高岡市埋蔵文化財分布調査概報』Ⅰ～Ⅴとして報告している。

旧市北部地域の調査は、平成６年度・平成７年度の２箇年で実施するように計画した。旧市南部地域に比べて宅地化している部分が多く、実質的な調査対象面積が少ないこと、そして調査規模を拡大したことによってこのような計画となった。それぞれ対象とする地区は以下の通りである。

１．平成６年度調査実施地区（旧市北部地域北半部）；牧野地区、能町地区　1,003ha

２．平成７年度調査予定地区（旧市北部地域南半部）；野村地区、定塚地区、博労地区、平米地区、川原地区、成美地区、横田地区、西条地区　1,957ha

今年度の分布調査

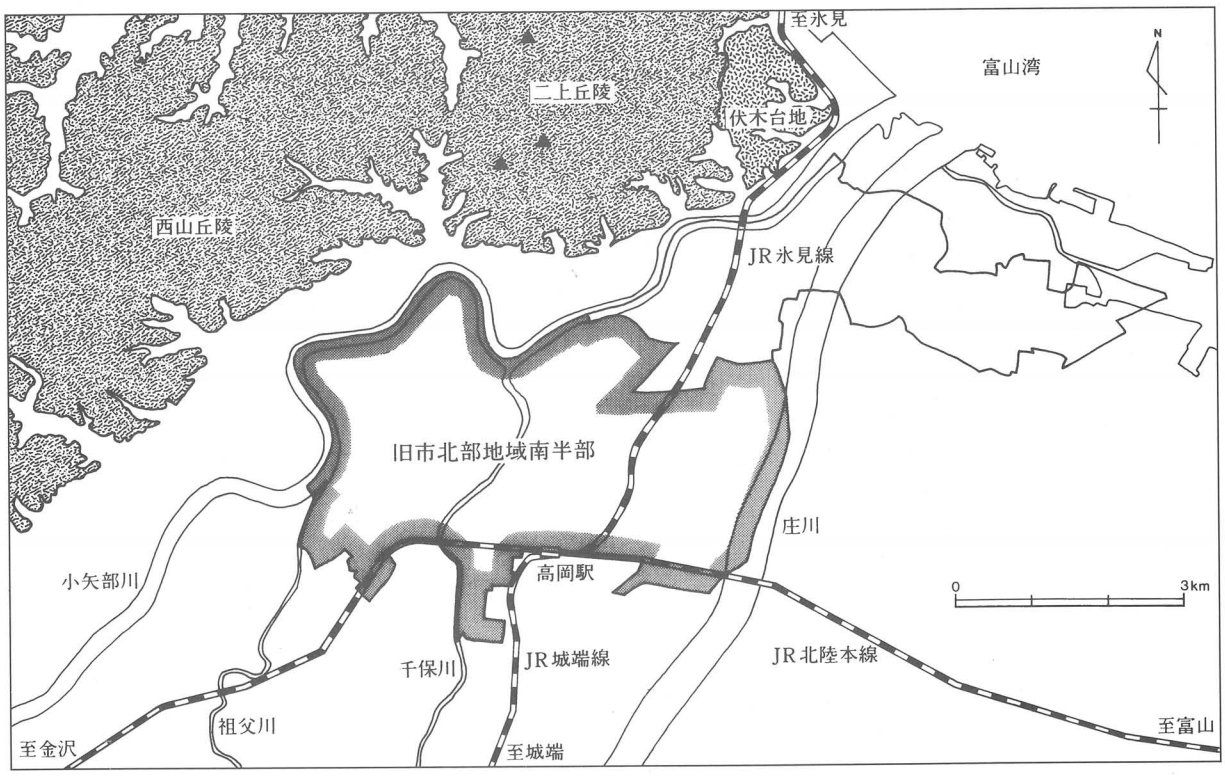
以上のような経緯で、本年度は、旧市北部地域の南半部の、野村地区、定塚地区、博労地区、平米地区、川原地区、成美地区、横田地区、西条地区に於いて分布調査を実施することに至った。現地踏査は４月と11～12月に実施した。

地域の概観

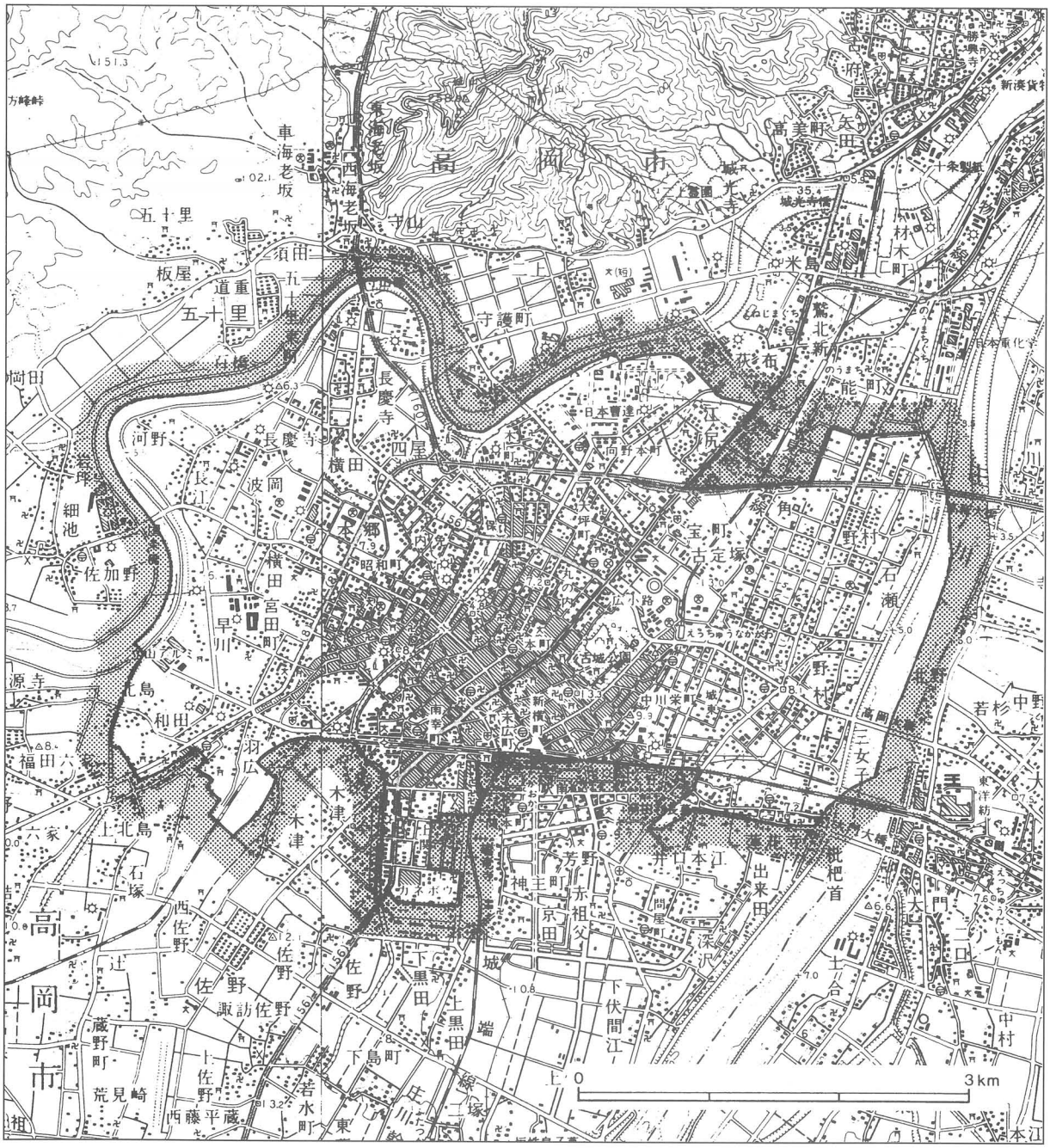
今回の調査対象地は東西約６km、南北約３kmを計る。東西を庄川と小矢部川が流れ、調査対象地の中央やや西寄りを千保川が北流して小矢部川へ合流している。北側は国道８号線のやや北側まで、南側はＪＲ北陸本線付近までである。地形的には高岡市の中心市街地を載せる洪積台地（高岡台地）とその周辺の住宅地や商工業地帯となっている沖積低地部分とからなっている。現在の庄川は、市域の東側を北へ流れているが、この流路に固定したのは、1670年（寛文10年）から1714年（正徳４年）にかけての加賀藩による工事の結果である。それまでの庄川は千保川を本流としつつも、奔放していたとされる。当地域も台地部分以外は度々洪水に悩まされたとされ、また現在の市街地からは伺えないが、湿地地帯も多かったとされる。

当地域は、高岡台地に旧石器や縄文時代の遺跡があり、古くより開けたことが判明している。当地域の北北東約５km、小矢部川の向こうの伏木台地には、古代に国府・国分寺が設置された。万葉集巻19の越中国守大伴家持の長歌と短歌に出てくる地名「石瀬野」を、当地域の東側、野村地区の石瀬に比定する説も、家持の遊狩の地を国府の近辺が相応しいとの考えからきている。古代では射水郡内に含まれるが、この中の何郷かは不明である。

中世には広大な二上荘の中に含み得る。また国衙領を示す地名も見受けられる。鎌倉末期～南北朝期に見える「西条郷」は射水郡南西部の国衙領で、戦国期には西条保と称された。近代の西条村に相当する地区とされている。西条村はそれまでの、波岡村、北島村、長慶寺村、早川村、長江新村が合併して成立したものである。今回の調査対象地の西側に位置する。南北朝期～戦国期の「石瀬保」は、古代の「石瀬野」と同様に、高岡市の石瀬に比定する説と富山市の岩瀬に比定する説とが対立している。



第１図　調査対象地区分図（１／10万）



第２図　調査対象地位置図（１／５万）

近世の出発点は、当時関野と呼ばれていた高岡台地に、加賀２代藩主前田利長が築城したことによる。地名も高岡と称されることになった。この高岡城は数年の後廃城となったが、高岡の町は、商工業の町として存続が図られ町奉行所が置かれた。

近代になり、1889年（明治22年）市制町村制の施行により高岡町は周辺の村も含めて高岡市となった。今回の対象地は、これらにその後合併した、掛開発村、下関村の一部、西条村、横田村、能町村の一部、野村村を含んだ地域である。

Ⅱ　遺跡各説

11. 江尻Ａ遺跡

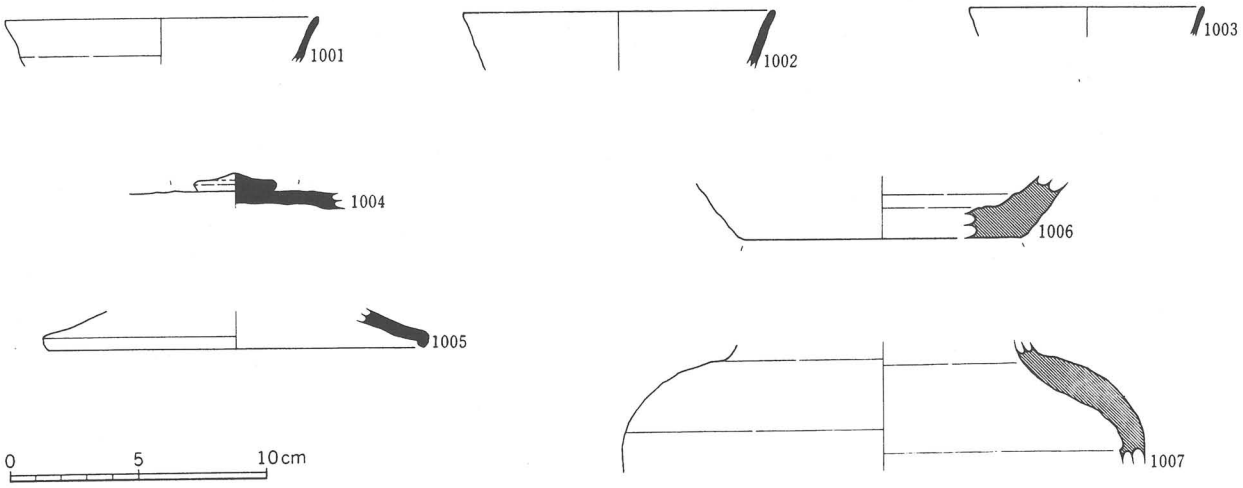
江尻集落は、東西に走る国道８号線と高岡市中心部より北北東、伏木方面へ向かう主要地方道伏木港線との交差点の北側に位置する。北側へ舌状に張り出す台地の上に、江戸時代以来の歴史を持つ集落が形成されている。当江尻Ａ遺跡は、この台地の北側に位置し、一部は台地の下の所にまで延びている。遺跡の範囲は南北145ｍ×東西125ｍである。現在畑地となっている部分を中心に遺物が採集できるが、周囲が宅地化されているためこれ以上の範囲確認は不可能である。地形的には、これ以上の範囲が遺跡地である可能性が強い。採集された遺物は、土師器、須恵器、珠洲である。第３図として、採集した土器類の実測図を示した。1001～1003の３点は須恵器杯の口縁部である。1004は須恵器杯蓋で天井部とつまみ部である。つまみ部は偏平な宝珠形となっている。1005は須恵器杯蓋の口縁部である。1006は珠洲の擂鉢である。破片のためもありオロシ目は確認できない。1007は珠洲の壺で、肩部の破片である。

12. 江尻Ｂ遺跡

江尻集落から土器片等が出土することは、『高岡市史』でも指摘されているが、集落を載せる台地は一部の縁辺部を除いて宅地化されており、土器片等の採集は不可能である。当江尻Ｂ遺跡は以前から遺跡とされている遺跡であるが、宅地化されてしまっており、範囲等は不明確である。一応、江尻集落の中心部から東側一帯と推定している。

13. 江尻Ｃ遺跡

江尻集落の西側に白山比羊神社が鎮座しているが、この一帯の畑地に遺物が散布している。神社の南側の一部以外宅地化が進み、遺物散布地の拡がり等は明確ではないが、当江尻Ｃ遺跡の範囲は、一応南北800ｍ×東西100ｍとしておく。ここは、江尻集落のある台地の西側縁辺部に当たる。採集された遺物は、土師器や須恵器の小破片である。

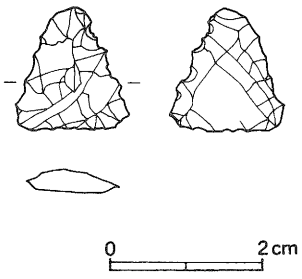


第３図　江尻Ａ遺跡出土土器実測図（１／３）

須恵器；1001～1005、珠洲;1006.1007

14. 江尻南遺跡

江尻集落の南南西に位置する。東西南北を、ＪＲ氷見線、加越能鉄道本社、こまどり学園、国道８号線で囲まれた水田地帯の遺物散布地である。江尻集落を載せる台地から続く微高地ではない。これとの間は低地となり、現在主要地方道伏木港線や加越能鉄道万葉線が走っている。ここには、縄文時代後・晩期の土器が多く散布している。石鏃も１点採集した。また、土師器、須恵器、珠洲等も採集している。縄文時代後・晩期の遺跡であり、古代・中世においても遺跡地であったと判断される。地形的には周囲よりやや高く、微高地を選んで立地していることが窺える。遺跡の北側には国道８号線が東西に走るが、この付近でも縄文土器が多く採集されることから、国道８号線のやや北側までが遺跡の北限と言い得る。遺跡の範囲は、南北275m×東西235mである。遺跡名については、他の江尻地区の遺跡、江尻Ａ～Ｃ遺跡と立地条件を異にするので、地名にアルファベットを付けて区別することをせず、江尻Ａ～Ｃ遺跡や江尻集落の台地の南側に位置していることから、命名した。



第４図　江尻南遺跡出土
石鏃実測図（実大）

15. 向野遺跡

小矢部川と千保川との合流点右岸には、かって港津として栄えた木町が所在する。ここの北東側一帯が掛（懸）開発村である。現在は宅地や工場用地となっている。この付近から以前土器類が出土し、遺跡地とされてきた所である。

16. 向野本町遺跡

国道８号線の北側で、宅地等に囲まれた一角の遺物散布地である。神社や墓地も付近に存在している。採集された遺物は、土師器、須恵器、珠洲である。遺跡の範囲は南北125m×東西100m程であるが、これ以上に拡がる可能性が強い。

17. 下石瀬遺跡

『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』で縄文時代の遺跡地となっている。下石瀬集落の南方、白山神明社の南側一帯が遺物散布地である。今回採集された遺物は、土師器、須恵器、珠洲、近世陶磁器である。遺跡の範囲は南北220m×東西180mである。

18. 蓮花寺遺跡

真言宗蓮花寺は等覚山と号し、現在蓮花寺集落（旧蓮花寺村）の中程に位置する。西側に接して井口神社がある。寺伝によれば寛喜３年（1231）鎌倉等覚山大楽寺の観行律師の創建と言う。本尊の木造十一面観音菩薩立造（鎌倉時代、県指定彫刻）や鎌倉時代の宝筐印塔等、多くの文化財がある。現在の蓮花寺は旧街道の南側にあるが、以前はこれより北側、東西に走るＪＲ北陸本線を挟んで、壮大な伽藍を誇ったとされている。井口神社には現在、平安時代の陶硯１点が伝わるが、これは前身の若宮八幡社の跡地から、他の２点の陶硯、須恵器瓶と搬出したものとされる。そして、この若宮八幡社は旧蓮花寺に隣接していたとされる。

この陶硯、すなわち風字硯については、京田良志氏が報告されている。ここで他の蓮花寺の文化財と共に12～13世紀の所産とされている。これらからは、蓮花寺が平安時代後期に遡ることが確実である。

一方、現地踏査においても、現在の蓮花寺の北方の水田等から土師器、須恵器、珠洲等が採集された。これらのことから、現在の蓮花寺の北側一帯を、旧蓮花寺や、それ以前の寺院等の遺跡の所在地として、蓮花寺遺跡として、埋蔵文化財の包蔵地としておく。

19. 古定塚遺跡

高岡台地は現在の高岡市街地の中心部を含み、ＪＲ高岡駅から古城公園（高岡城跡）一帯の南西～北東方向に延びる。この台地の北東端部に当古定塚遺跡が所在する。昭和38年４月に上坂成次氏により、旧石器が発見され、西井龍儀氏により報じられた。発見されたものは彫刀形石器１点で、全長75、最大幅34、最大厚10mmを計る。発見地点は当時の富山大学工学部の校庭（現在は県立高岡高等学校が移転し設置されている）の北端を少し下った所である。当地の西側をＪＲ氷見線が南北に走っているが、この線路敷設の時の掘削により、遺物を包含する土層が削り取られ、出土したものと推定されている。遺跡の範囲を明確にすることはできないが、地形等の観点より、遺物出土地の南側一帯の台地縁片を遺跡地としておく。当遺跡の範囲と考えている所は、現在、古定塚、中川園町、中川１丁目となっている所であるが、既に命名されていることや、江戸時代以来の古定塚とその周辺に該当するので、従来からの名称に従い、古定塚遺跡としておく。

20.入定塚遺跡

中川村熊野権現社の祖先の利長坊という山伏が入定した塚とされる遺跡である。現在、県立高岡高等学校は、南西側から延びて来た高岡台地の北東側に位置するが、この敷地は、以前、富山大学工学部、高岡商業専門学校、高岡高等商業学校の敷地として利用されてきた。この敷地の北西隅部に一つの塚状の高まりがある。「入定」伝承のある塚で、地元では「ポンポン山」と称されている。『越中志徴』には次のように記されている。

「宝永誌に、中川村領内入定塚と申塚有之候。塚の廻り三拾間計。高さ壹間計の塚にて御座候。昔行人被致入定候。按ずるに、いにしえの僧侶或いは行者の生きながら土中に入て自滅せし塚とて、入定塚と稱するもの加越能に多し。」

古定塚の地名は江戸時代の古定塚町からの系譜を引いている。高岡築城の時、成立した町であるが、江戸時代前期に住民の多数が高岡城の南側へ移住し、定塚町が成立したため、古定塚町と称されるに至ったのである。「定塚」の地名は、この入定塚に由来するものである。

平成６年度にこの入定塚遺跡の北東側を建設工事に伴い試掘調査実施する機会を得た。現在の県立高岡高等学校の敷地の北側に接するほぼ三角形の地区である。地番は古定塚86－3他である。試掘坑２本、約58m^2の発掘を実施した。台地の縁辺から湿地帯にかかる地区で、調査対象地の東側は湿地帯で全てを掘り尽くすことはできなかった。西側は安定した基盤層があり台地の一部と確認した。西側からは、土坑、溝、ピット等の遺構が確認され、土師器、陶磁器等の遺物が出土した。遺物の時期は中世後期から近世のものであった。このことから、「塚」そのもの以外にも関連の遺構が存在することや、当遺跡の範囲の一端が確認できたと判断した。

21. 中川遺跡

中川遺跡は源野遺跡とも称され、以前より著名な縄文時代晩期の遺跡である。高岡台地の北部地区、古定塚遺跡、入定塚遺跡の南西側に位置する。県立高岡高等学校や富山県高岡文化ホールから、北西方の高岡市役所や志貴野中学校方面へ行くには、ＪＲ氷見線の踏切を渡り、南側から来た桜馬場長慶線に合流してカーブした後、直線的にやや下りながら北北西へ進む。このカーブが終えると、右側（北側）に光慶寺の境内、左側に旧県営プール跡地の高台が望む。この付近が中川遺跡である。1925年（大正14年）、現在の県立高岡高等学校の敷地に、高岡高等商業学校が建設される頃、上記の道路の拡幅作業が実施され、旧県営プール跡地の台地側を掘削した際に、多数の土器や石器が出土した。高岡出身の民俗学者倉田一郎氏は、1927年（昭和２年）に現地を調査され、1930年（昭和５年）に「越中國高岡の石器時代遺跡」として学会に発表された。

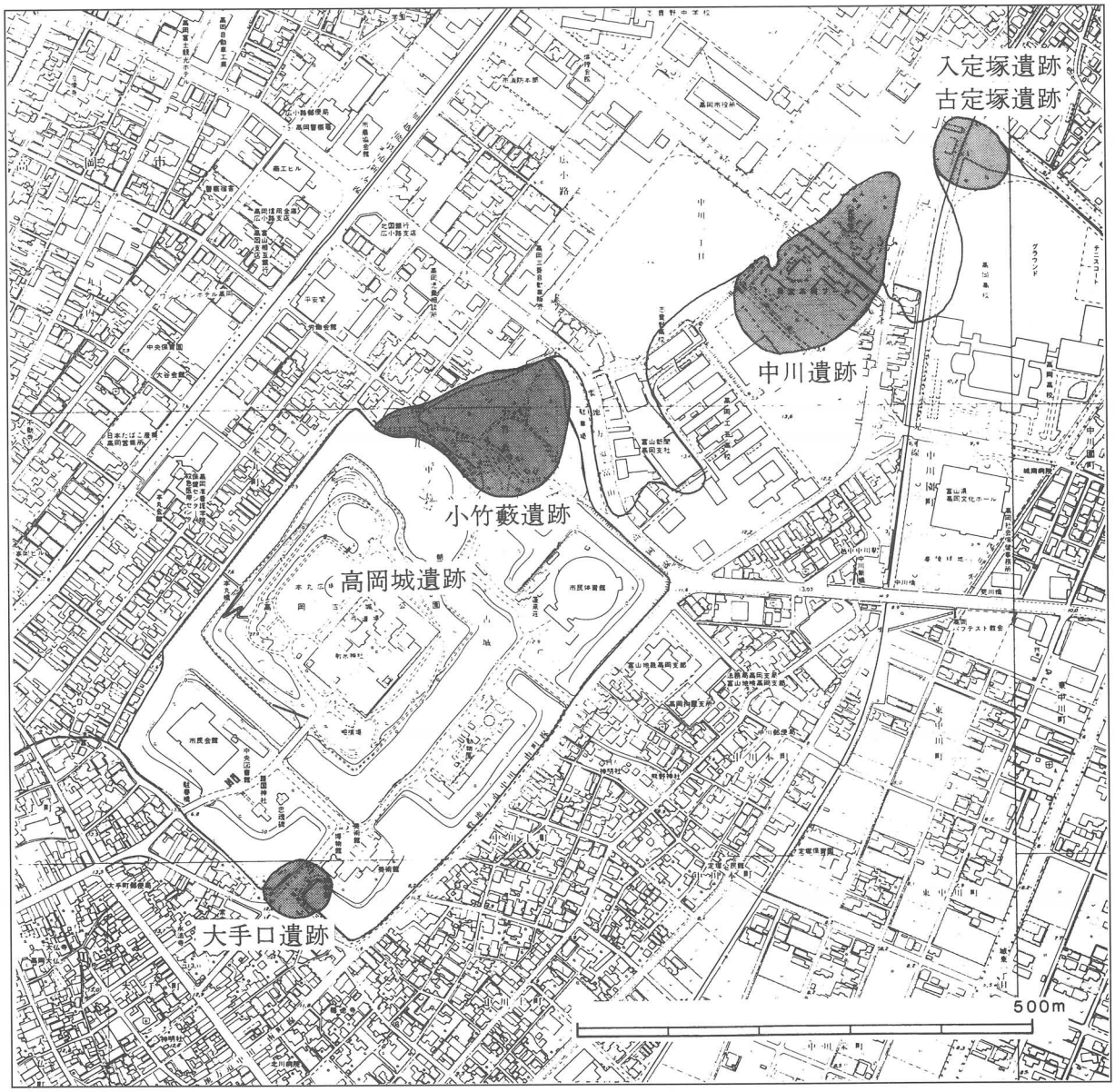
当時陸奥式土器（亀ケ岡式土器）とされていたものが、県下にも分布していることを明らかにされた。さらに数年後、湊晨氏はこの中川遺跡の例も含め、県下の陸奥式土器の研究を進展させた。その後、昭和30年に富山国民体育大会を控え、県営プールが造成されたりしたが、当遺跡については、発掘調査等が実施されることはなかった。

最近に至り、県営プールが移転新設され、この跡地の利用計画に伴い、高岡市教育委員会が試掘調査を実施した。平成２年度には、旧県営プール敷地内にて試掘調査を実施した。この結果、南西側は遺物の出土等が希薄になり、遺跡の南東側は旧県営プール敷地内で収まることを確認した。平成７年度には進入路の造成計画に伴い、台地の西側縁片での試掘調査を実施し、予想通り斜面地に遺物が包蔵されていることを確認した。また平成７年度における旧県営プールの施設撤去工事では立会いをし、遺物の包蔵状態の確認や採集を行った。遺跡の範囲については、旧県営プールの敷地の南西側が掘削を受けている点や、試掘調査の結果より、南側はほぼ旧県営プールの敷地内で収まるものとしておく。北側は道路を挟んで、台地が光慶寺の境内地に延びているが、地形等の観点より、光慶寺の境内地までが遺跡の範囲としておきたい。遺跡の時期については、縄文時代晩期前半を中心とするものではあるが、試掘調査において、弥生土器乃至土師器と思われる破片も出土しており、縄文時代以外の遺跡の存在も注意しなければならない。

22. 小竹藪遺跡

高岡城の跡地である古城公園の北西部は、小竹藪と称されている園地であると共に、縄文時代の中期から後期前半に亘る遺跡地でもある。現在は、面積約28,000㎡の平坦な台地となっている。築城当時は中央に小高い盛土があったとされている。また江戸時代の記録（図面）には御城外と記されている。小竹藪台地の北側から西側にかけては、沼沢地となり、さらに北西側にも谷状に沼沢地が入り込み、台地は南東側から北東側へやや突き出た形となり眺望が開けた場所であった。北西側池の端から小竹藪台地へ至る切り通しの断面に遺物の包含層が確認されたことが切っ掛けとなり、1953年（昭和28年）に発掘調査が実施された。これは高岡文化財保存会の藤平長門氏が中心となって実施したもので、３ｍ×2.5ｍの範囲で実施された。遺構は明確にすることができなかったが縄文土器や石器が多量に出土し、それまで一応土器や石器の出土が知られていた当地が遺跡として明確になった。出土遺物は小島俊彰氏によって整理研究され、1964年（昭和39年）に『高岡公園小竹藪縄文遺跡』として報告された。

最近では古城公園の整備事業との絡みで、高岡市教育委員会による発掘調査が実施されている。平成３年11月には、小竹藪地区の西側での小竹藪トイレの建設工事に先立ち試掘調査を実施した。この調査ではバックフォーにより表土を除去したところ礫層が検出され、これを基盤層と判断したため、この時点で調査を終了させた。平成４年２月には小竹藪地区の南側に位置する梅苑地区で、ここの整備計画に伴い試掘調査を実施した。縄文土器の出土はなかった。平成４年度の５月には、東側の中之島に望む斜面地で中之島トイレの建設工事に先立って試掘調査を実施した。縄文土器の包含層に匹敵する黒褐色土の土層を確認したが、遺物は出土しなかった。平成４年度の８月には、小竹藪地区全域を対象とする試掘調査を実施した。これは小竹藪地区の整備計画に対処したもので、小島俊彰氏を調査指導者として、遺跡の範囲確定を目的に実施した。この調査では試掘坑を12箇所設定し、発掘面積は合計718㎡となった。調査の結果、遺跡の範囲を南北80ｍ、東西120ｍと確定することができた。また縄文時代の遺物以外に、弥生土器片や土師器片（古墳時代前期）が出土し、この時代の遺跡としての可能性も出てきた。縄文時代の包含層が上記の範囲で見られたが、この上には厚く礫層が堆積していた。厚い所では約1.5ｍを計る。これは高岡城の築城に伴うものと推定された。平成３年11月の試掘調査では、この上面で止め、調査が不十分であったことをも認識するに至った。



第５図　高岡台地地区遺跡地図（１／7,500）

23. 高岡城遺跡

高岡城は近世の平城である。現在はこの跡地は古城公園となり、市民の憩いの場として親しまれている。1609年（慶長14年）、富山城に在城の加賀２代藩主前田利長は、火災による難を避け魚津城に移った。そして新たなる城地を当時、関野乃至関野ケ原と呼ばれていた高岡台地に決め、早速幕府の許可を取り、築城に掛かった。名を「たかおか」とし、後に『詩経』より「高岡」と記すことになった。一方、家督は養子の利光（加賀３代藩主利常）に譲っており、言わば隠居城として、高岡築城が始まった。縄張りは高山右近がなしたと伝えられている。1614年（慶長19年）利長は逝去し、その後1615年（元和元年）の「一国一城の制」により、高岡城は破却され廃城となった。しかし、濠塁はそのまま残り、明治維新を迎えた。1897年（明治８年）に服部嘉十郎や住民の請願が実り、日本最古の公園として指定され、現在の古城公園となっている。

高岡城は、北東～南西方向に延びている高岡台地に立地している。この地形を利用しているため、城は主軸方向を北東～南西方向にとる長方形となっている。縄張りは郭を２列に配置する形となっている。主要な郭は５つあり、西側に二の丸、本丸を配置し、東側に鍛冶丸、明丸、三の丸を配置している。さらに北側には、城外とされる小竹藪がある。城の西側から北側は沼沢地となり、自然の要害をなしており、西側の水濠が一重に対して、東側が二重となっている。大手口は南側、搦手口は東側に設置している。

北側の小竹藪のさらに北側は、現在主要地方道富山高岡線（旧８号線）が通っている凹地（沼沢地からの続き部分）を挟んで、現在社会保険健康センター、高岡工芸高等学校、高岡市美術館等がある小松原台地へと続いている。古城公園としては、水濠で囲まれた部分と小竹藪地区であり、面積は228,642.88㎡、内水濠は74,047㎡である。また古城公園は県指定史跡の高岡城跡でもある。

高岡城に対する埋蔵文化財関係の調査は、ここ数年公園内での工事に伴い幾つか実施されたに過ぎない。限られた調査ではあるが、各郭や郭を結ぶ通路（土橋）には、水濠を掘った時の土砂による整地が実施されていることが確認されている。

24. 大手口遺跡

高岡城の正面入口、すなわち大手口は南側である。現在大手町方面より右手に高山右近顕彰碑や高山右近像を見て、土橋を渡り城内の鍛冶丸へ至る。鍛冶丸は現在博物館が設置されている郭である。郭の入口には升形門があったとされ、この郭は升形とも呼ばれている。大手町方面からはなだらかな上り坂となり、城内へ入る形となっている。この土橋の壁面の左右から縄文土器が採集されている。林寺巌州氏が採集されていると共に、今回の分布調査でも採集された。平成７年度には、この土橋の部分に送水管が敷設されることに伴う発掘調査を実施し、縄文土器の出土を確認している。ただし、縄文土器の包含層や縄文遺跡の範囲確認にまでには至っていない。土橋の左右は「堀」のため掘削されているが、土橋の部分を中心に縄文時代の遺跡が存在していることは確実である。縄文土器は小島俊彰氏により、縄文時代中期のものがあることが確認されている。

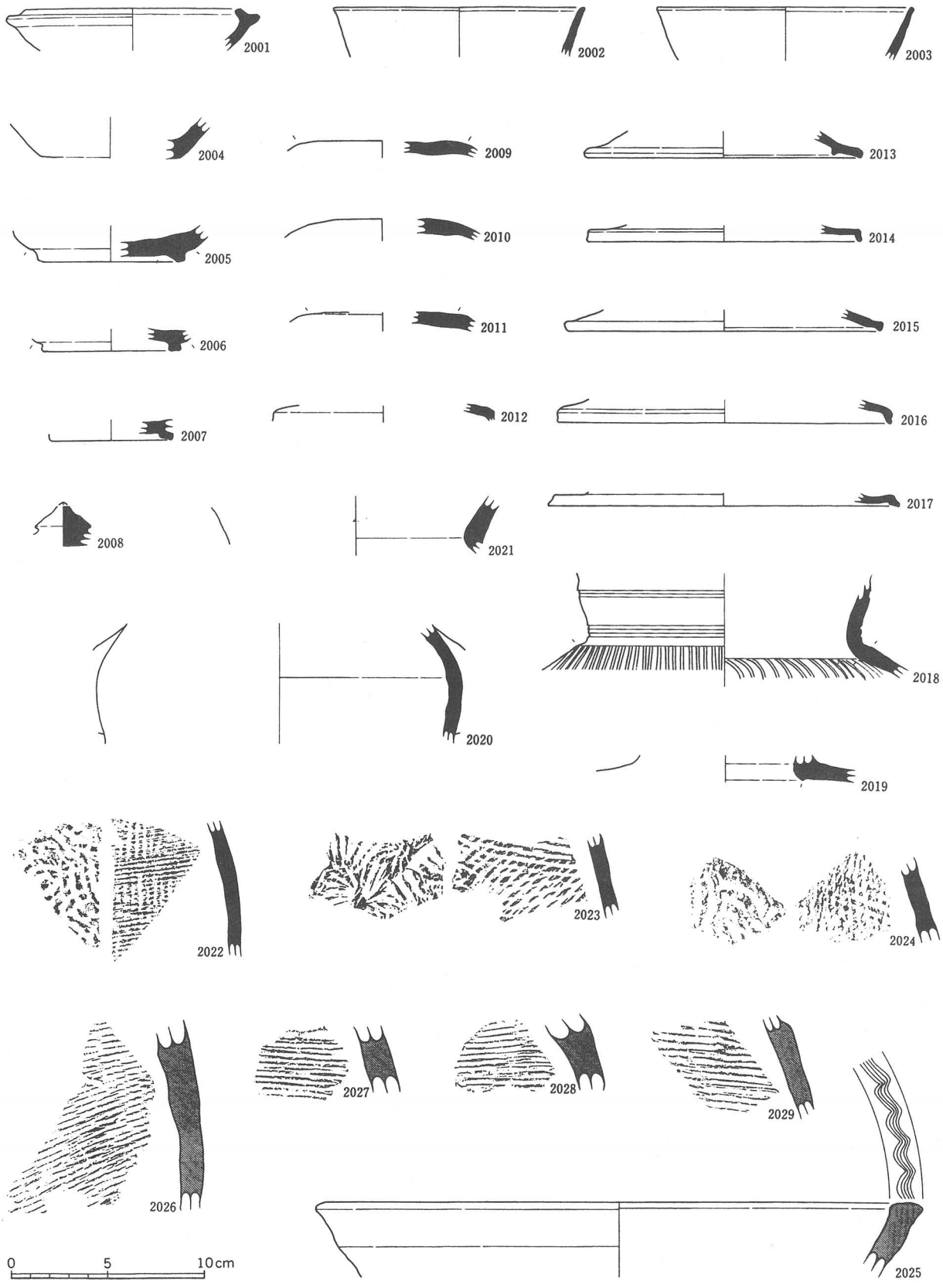
25. 高岡町遺跡

前田利長の築いた城下町であり、廃城後は町人の町となり、高岡町奉行が置かれた。考古学的には範囲や内容を明示できないが、近世都市遺跡として、その存在を指摘しておきたい。

26. 波岡北遺跡

ＪＲ高岡駅付近より、北西方向に向かう昭和通り（主要地方道高岡氷見線）は、国道８号線と交差した後、波岡集落を通り抜け、国条橋で小矢部川を渡り国吉方面へ達している。波岡付近では、この道路の北側に県立高岡商業高等学校があり、南側に式内速川神社が位置する。この北側の高岡商業高等学校付近から南側の速川神社付近にかけて遺跡が存在することはすでに『高岡市史』で指摘されている。なお、『高岡市史』で言う、当時の市立農業試験場の跡地は現在高岡商業高等学校のグランドで、一部は隣接する工場の敷地となっている。波岡地区は宅地化が進んでいるとは言え、高岡商業高等学校の北西側は、水田や畑地で従来からの地形の状況が把握できる場所である。西側から望めば、微高地に波岡集落が立地していることがよく理解できるものとなっている。当「波岡北遺跡」とした所は、高岡商業高等学校北西側で、遺物が散布している地区である。遺跡の範囲は南北230m×東西290mである。採集した遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲である。

第６図に示した土器では、2003．2012．2025が当遺跡出土土器である。2003は須恵器杯の口縁部である。2012は須恵器杯蓋である。天井部と口端部が欠損している。2025は珠洲の擂鉢である。



第６図　波岡地区出土土器実測図（１／３）

須恵器；2001～2024、珠洲；2025～2029

27. 波岡東遺跡

高岡商業高等学校の南側に遺物が多く採集できる水田がある。この地点を中心に一つの遺跡とした。周りは高校の敷地や宅地であり、遺跡の拡がりは確認できないが、この水田とその周囲を遺跡としておく。範囲は一応南北160m×東西155mである。採集した遺物は須恵器が多く、土師器や珠洲もある。

第6図に示した土器では、2002．2004～2011．2013．2015.2016.2019～2022．2024が当遺跡出土土器である。それぞれの内容は以下のとおりである。

2002．須恵器杯の口縁部。

2004．須恵器杯の体部。高台は付かないものと判断される。

2005～2007．須恵器高台付杯の底部。

2008．須恵器蓋のつまみ部。やや大型の宝珠形のつまみであり、壺類の蓋になる可能性がある。

2009～2011．須恵器杯蓋の天井部。口縁部及び天井部中央が欠損している。

2013．須恵器杯蓋の口縁部。口端部内面にかえりが付く。

2015．2016．須恵器杯蓋の口縁部。口端部は下方へ短く折れる。

2019．須恵器瓶類の頸部。横瓶の一部になる可能性がある。

2020．須恵器瓶類の肩部。耳部の一部が確認でき、双耳瓶等の器形の一部である。

2021．須恵器甕の頸部である。

2022．2024．須恵器甕の胴部片である。

28. 波岡南遺跡

波岡集落の南側、はおか保育園や速川神社周辺の水田や畑地からは、遺物が採集される。『高岡市史』の指摘どおりである。ここも微高地であり、はおか保育園周辺以外水田や畑地が少なくなって、工場や宅地となっており、遺跡の範囲は厳密にはできないが、遺物の散布状況から、南北340m×東西190mを遺跡とした。採集遺物は、土師器、須恵器、珠洲である。「旧県遺跡地図」では、№143として「早川遺跡」がある。当遺跡の南側、速川神社付近であり、これは当遺跡に含めて理解したい。

第6図に示した土器では、2018．2023．2026～2029が当遺跡出土土器である。2018は須恵器広口壺の頸肩部片である。頸部には沈線文が廻っている。2023は須恵器甕の胴部片である。2026～2029は珠洲甕の胴部片である。

29. 波岡西遺跡

波岡集落の西側の低地部分に位置する。上記の波岡北遺跡、波岡東遺跡、波岡南遺跡が微高地上に立地しているのと対照的である。採集した遺物は須恵器が多く、土師器や珠洲もある。遺跡の範囲は南北85m×東西145mである。

第6図に示した土器では、2001．2014．2017が当遺跡出土土器である。2001は須恵器杯身である。受部の付く杯身の口縁部片である。2014.2017は須恵器杯蓋の口縁部片である。

30. 瑞穂町遺跡

波岡地区の西側、西部中学校の南側一帯が当遺跡である。周囲は宅地化している。採集した遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲、近世陶磁器である。遺跡の範囲は、南北180m×東西140mである。宅地化しているため遺跡の拡がりを十分把握できないが、水田等で、遺物の散布状況を確認できる所を遺跡範囲とした。「旧県遺跡地図」では、№144として「波岡遺跡」がある。当遺跡の南西側であり、これは当遺跡に含めて理解したい。

Ⅲ 結　　語

今回対象とした地区の遺跡について、現地踏査と資料整理を行った結果、既述のとおり、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲確認と、新規に埋蔵文化財包蔵地を数箇所確認した。また一部の遺跡の名称の変更や整理を行った。既存の遺跡地図である1993年発行の『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』（「新県遺跡地図」とする）と1972年発行の『富山県遺跡地図』（「旧県遺跡地図」とする）記載の遺跡との対照表を「付表１」として示したので参照されたい。

今回の調査、そして本報告書において、新たに埋蔵文化財包蔵地とした遺跡は、５遺跡である。また『高岡市史』に関連する記載があるが、遺跡地図等に明示されていない遺跡を再確認して、２つの遺跡として、明示した。よって、周知の遺跡を含めて、20箇所の遺跡、埋蔵文化財包蔵地となった。

本報告書	新県遺跡地図	旧県遺跡地図	備　　考
11. 江尻Ａ遺跡	202128　江尻Ａ遺跡	147　江尻Ａ遺跡	
12. 江尻Ｂ遺跡	202129　江尻Ｂ遺跡	148　江尻Ｂ遺跡	
13. 江尻Ｃ遺跡	202130　江尻Ｃ遺跡		旧県遺跡地図に149.江尻遺跡の記載があるが、地図上に明示がない。
14. 江尻南遺跡			新規
15. 向野遺跡	202131　向野遺跡	154　向野遺跡	
16. 向野本町遺跡			新規
17. 下石瀬遺跡	202204　下石瀬遺跡		古代～中世については新規
18. 蓮花寺遺跡	202137　蓮花寺廃寺跡	150　蓮花寺廃寺跡	
19. 古定塚遺跡	202132　古定塚遺跡		1963年に発見され、報告される
20. 入定塚遺跡	202133　入定塚遺跡		
21. 中川遺跡	202134　中川遺跡	151　中川(源野)遺跡	
22. 小竹藪遺跡	202135　小竹藪遺跡	152　小竹藪遺跡	
23. 高岡城遺跡	202136　高岡城跡	153　高岡城跡	
24. 大手口遺跡			新規
25. 高岡町遺跡			新規
26. 波岡北遺跡			『高岡市史』に関連する記載有り。
27. 波岡東遺跡			『高岡市史』に関連する記載有り。
28. 波岡南遺跡	202154　早川遺跡	143　早川遺跡	
29. 波岡西遺跡			新規
30. 瑞穂町遺跡	202153　波岡遺跡	144　波岡遺跡	

付表１　遺跡新旧対照表

名　　称	所　在　地	時　　代
11. 江尻Ａ遺跡	江尻	古代～中世
12. 江尻Ｂ遺跡	江尻	古代～中世？
13. 江尻Ｃ遺跡	江尻	古代～中世
14. 江尻南遺跡	江尻	縄文時代後・晩期、古代～中世
15. 向野遺跡	向野本町	弥生時代～中世？
16. 向野本町遺跡	向野本町	古代～中世
17. 下石瀬遺跡	石瀬	縄文時代、古代～中世
18. 蓮花寺遺跡	蓮花寺	古代～中世
19. 古定塚遺跡	古定塚、中川１丁目、中川園町	旧石器時代
20. 入定塚遺跡	古定塚、中川１丁目、中川園町	中世末～近世
21. 中川遺跡	中川１丁目	縄文時代晩期、弥生時代後期～古墳時代前期
22. 小竹藪遺跡	古城	縄文時代中・後期、弥生時代後期～古墳時代前期
23. 高岡城遺跡	古城	近世
24. 大手口遺跡	古城、大手町	縄文時代中期
25. 高岡町遺跡	大手町他	近世
26. 波岡北遺跡	波岡、長慶寺	弥生時代～近世
27. 波岡東遺跡	波岡	弥生時代～近世
28. 波岡南遺跡	波岡	古代～中世
29. 波岡西遺跡	波岡	古墳時代後期～中世
30. 瑞穂町遺跡	瑞穂町	弥生時代～近世

付表２　遺跡一覧表

今回対象とした地区の遺跡は、時代的には、旧石器時代から近世までである。遺跡の性格別に分類すると以下のようになる。

１．集落跡・一般包蔵地；江尻Ａ～Ｃ遺跡、江尻南遺跡、向野遺跡、向野本町遺跡、下石瀬遺跡、古定塚遺跡、中川遺跡、小竹藪遺跡、大手口遺跡、波岡北・東・南・西遺跡、瑞穂町遺跡。

２．中世寺院跡；蓮花寺遺跡。

３．中近世塚跡；入定塚遺跡。

４．近世城郭跡；高岡城遺跡。

５．近世都市跡；高岡町遺跡。

参考文献

倉田　一郎　1930　『越中國高岡に於ける石器時代遺跡」『人類学雑誌』第45巻第５号　岡書院

湊　　晨　1935　「越中における陸奥式土器」『考古学』第６巻第２号　東京考古学会

小林　行雄　1951　『日本考古学概説』　東京創元社

和田　一郎　1959　『高岡市史』上巻（高岡市史編纂委員会）　青林書院新社

京田　良志　1963　「高岡市蓮花寺出土の風字硯一面」『歴史考古』９・10合併号　歴史考古学会

小島　俊彰　1964　『高岡公園小竹藪縄文遺跡』　高岡市教育委員会

西井　龍儀　1966　「高岡市古定塚発見の彫刀形石器について」『大境』第２号　富山考古学会

西田　一茂　1967　「高岡城石垣符号の研究経過と今後の問題点」『オジャラ』１　富山県高岡工芸高等学校地理歴史クラブＯ・Ｂ会

升井　正一　1967　「高岡城の周辺と構造」『オジャラ』１　富山県高岡工芸高等学校地理歴史クラブＯ・Ｂ会

坂井誠一他　1974　『角川日本地名大辞典16－富山県』　角川書店

橋本　　正　1976　「御物石器論」『大境』第６号　富山考古学会

樽谷雅好他　1979　『高岡の伝承』（高岡市児童文化協会）　高岡市教育委員会

藤田富士夫　1983　『日本の古代遺跡13－富山』　保育社

深井三郎他　1985　『高岡古城公園の自然』（高岡生物研究会，高岡地学研究会）　桂書房

塩　　照夫　1985　「高岡城」『金沢城と前田氏領内の諸城』（日本城郭研究叢書５）　名著出版

千秋　謙治　1987　「とやまの塚三題，経塚・十三塚・入定塚」『埋文とやま』第18号　富山県埋蔵文化財センター

古岡英明他　1991　『たかおか歴史との出会い』（高岡市市制100年記念誌編集委員会）高岡市

小島　俊彰　1992　「小竹藪を掘る」『古城の友』第16号　高岡古城公園を愛する会

高瀬重雄他　1994　『日本歴史地名大系第16巻－富山県の地名』　平凡社

富山県教育委員会　　1972　『富山県遺跡地図』

高岡市教育委員会　　1983　『高岡の文化財』

高岡市児童文化協会　1990　『越中たかおか・ふるさと誌料抄』（児童文化シリーズ第６集）

富山県教育委員会　　1993　『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』

図　面・図　版

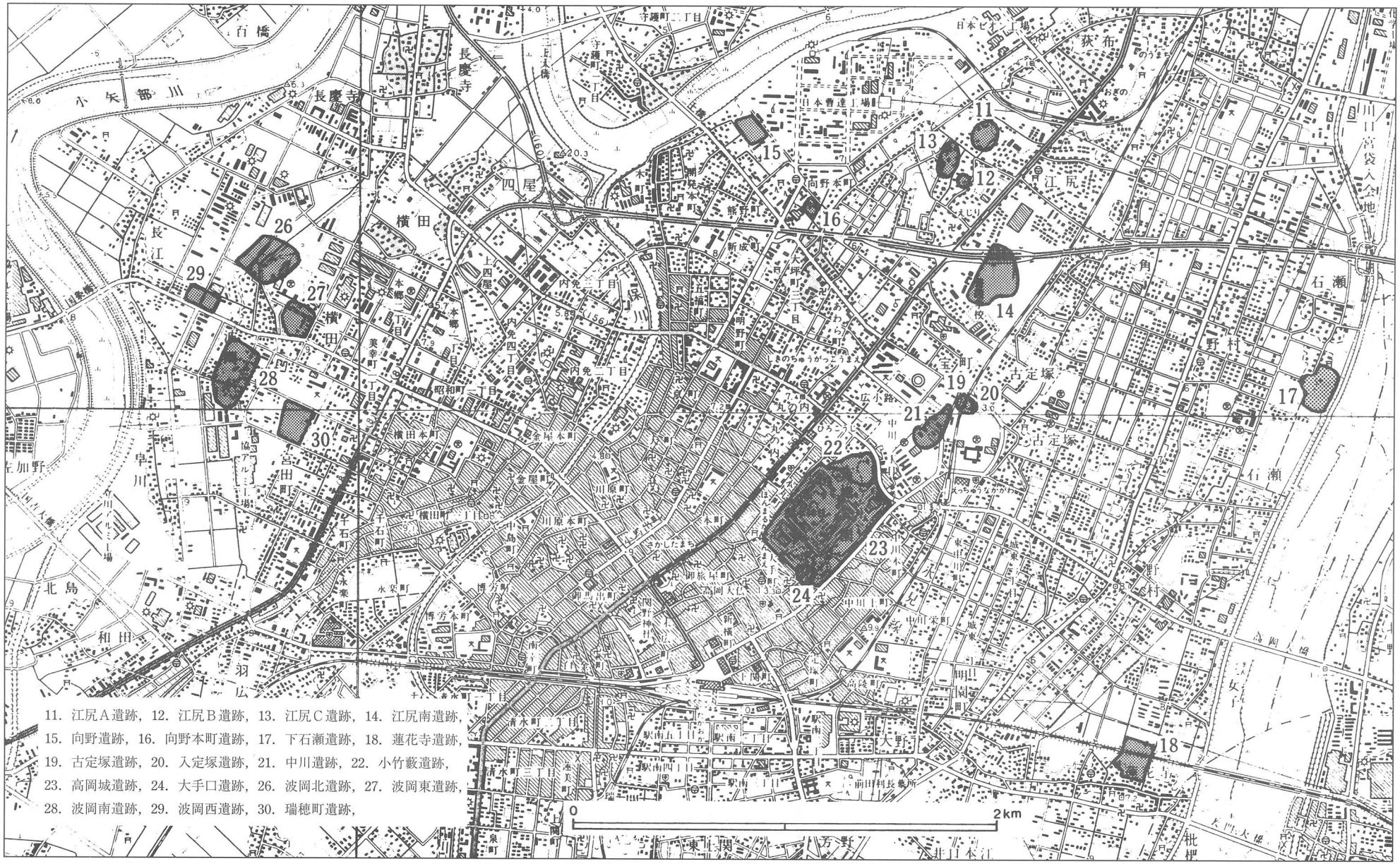
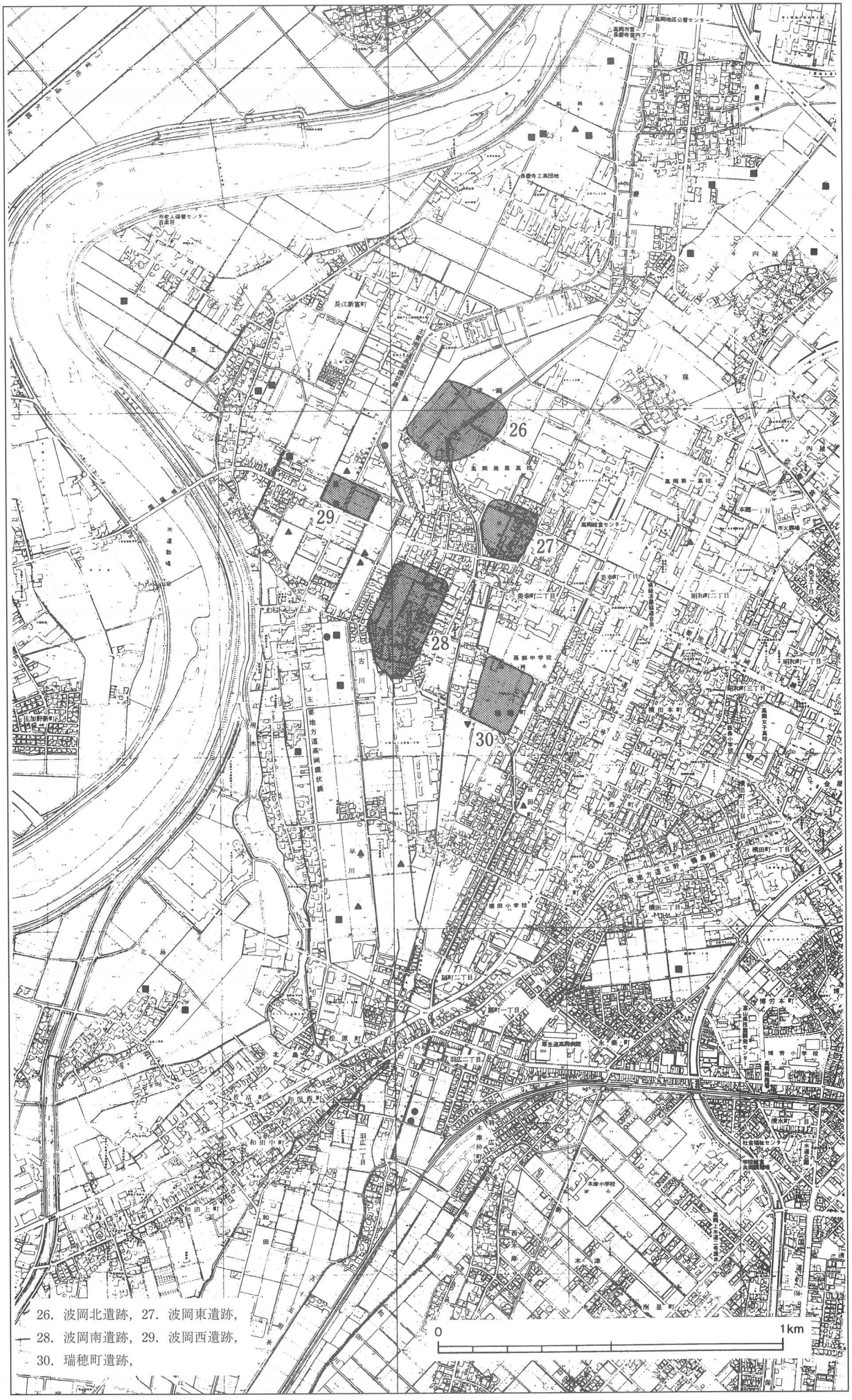


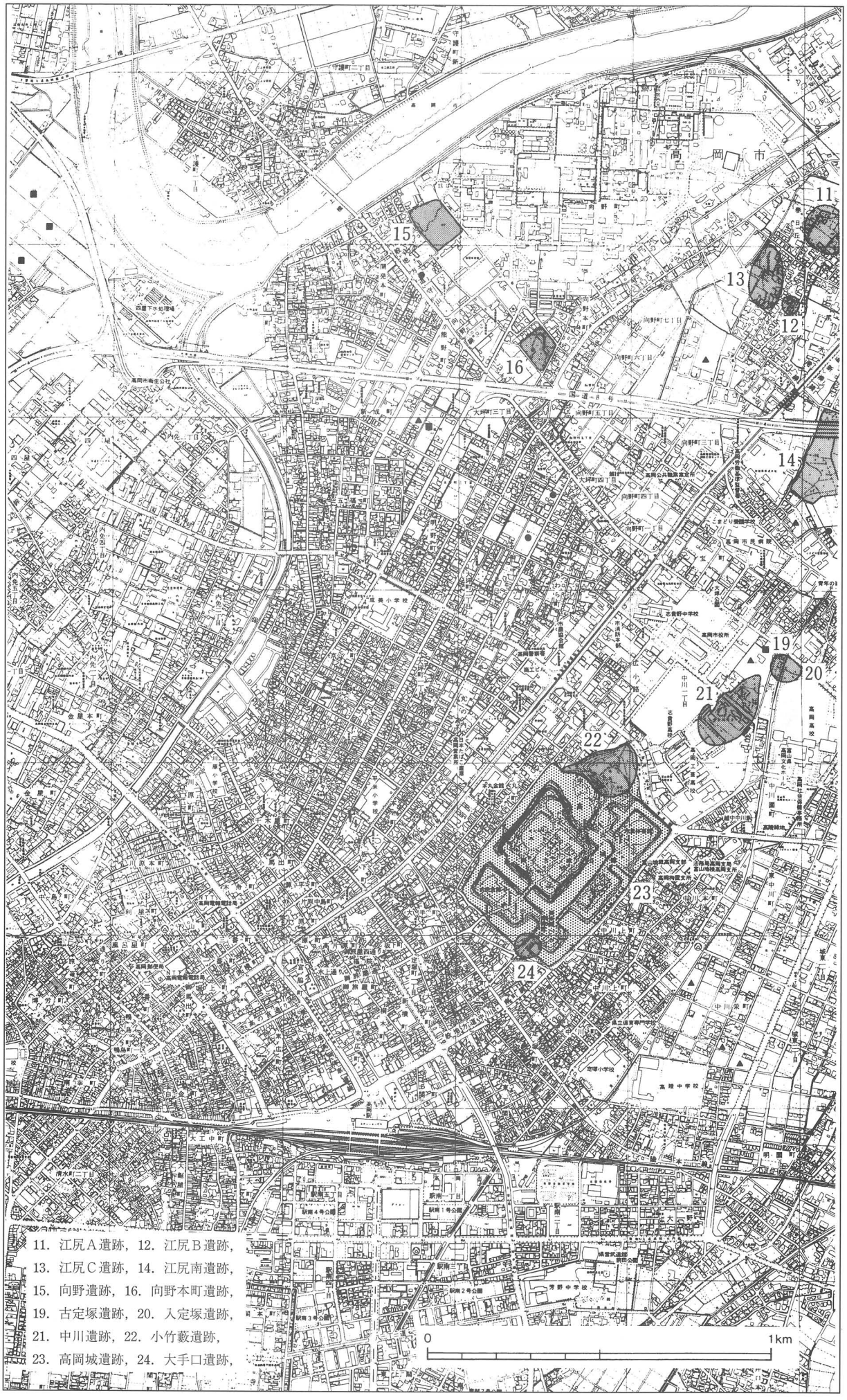
図1　遺跡地図　全体図　（1/25,000）

図面二　遺跡地図　部分図〔1〕（一／一万五千）



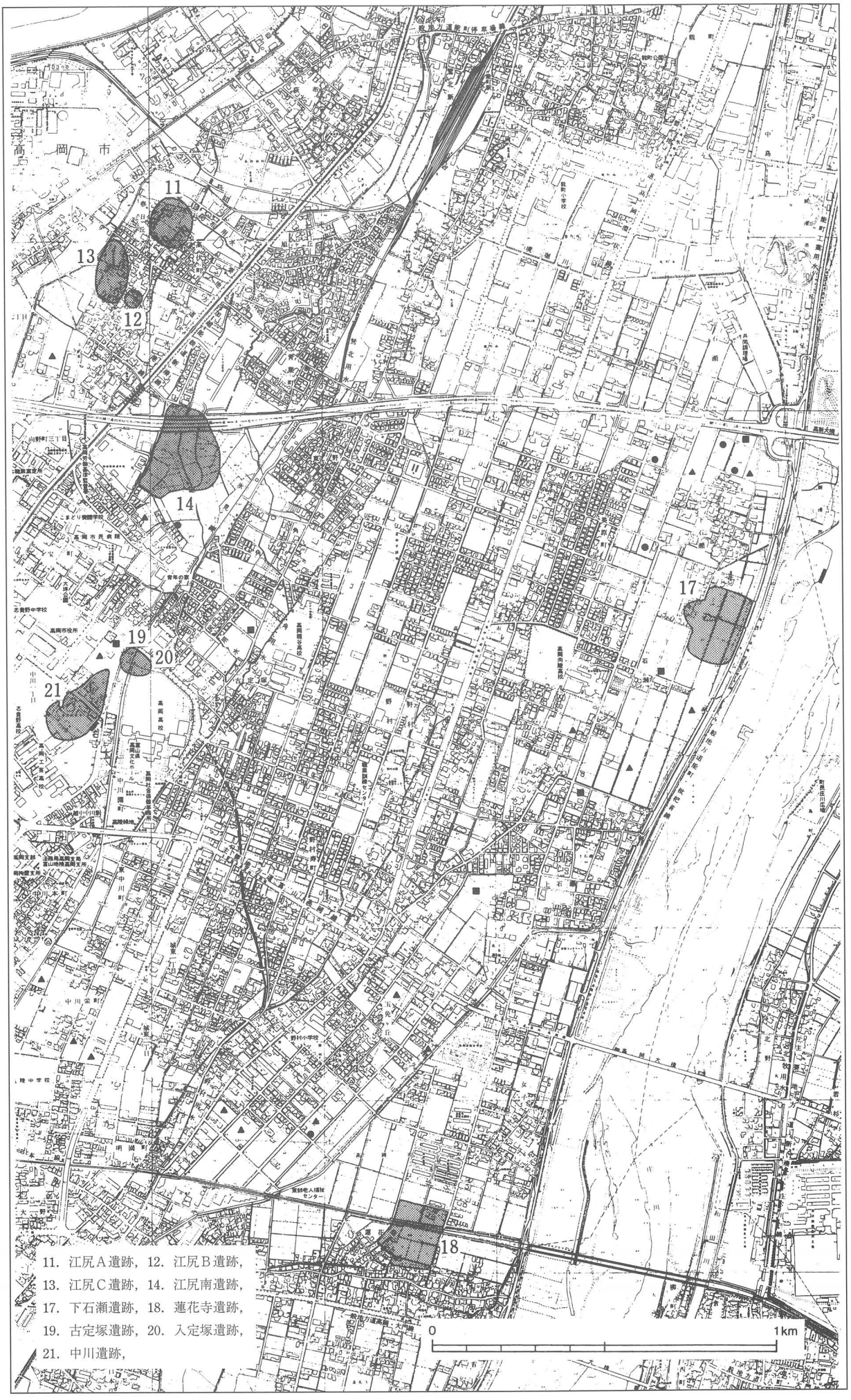
26. 波岡北遺跡，27. 波岡東遺跡，
28. 波岡南遺跡，29. 波岡西遺跡，
30. 瑞穂町遺跡，

図面三　遺跡地図　部分図〔2〕（一／一万五千）



11. 江尻Ａ遺跡，12. 江尻Ｂ遺跡，
13. 江尻Ｃ遺跡，14. 江尻南遺跡，
15. 向野遺跡，16. 向野本町遺跡，
19. 古定塚遺跡，20. 入定塚遺跡，
21. 中川遺跡，22. 小竹藪遺跡，
23. 高岡城遺跡，24. 大手口遺跡，

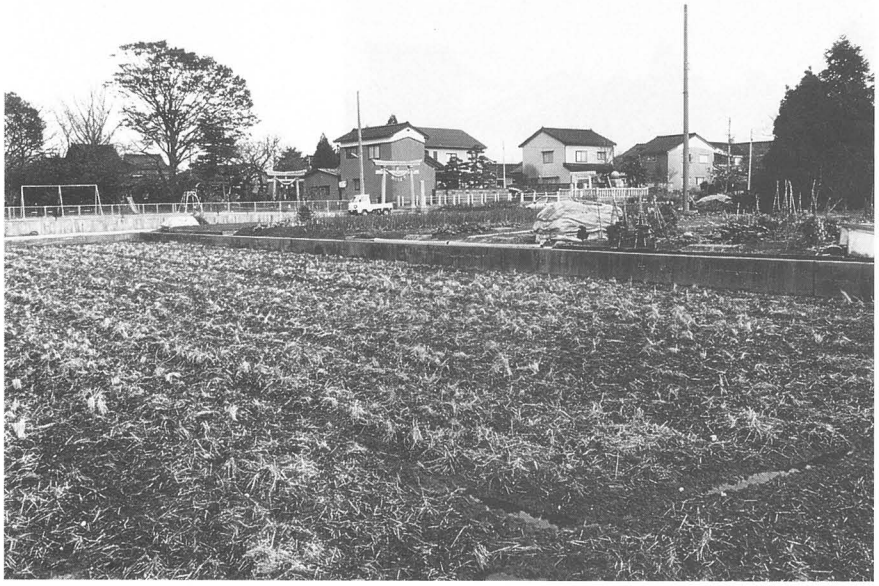
図面四　遺跡地図　部分図〔3〕（一／一万五千）



11. 江尻Ａ遺跡，12. 江尻Ｂ遺跡，
13. 江尻Ｃ遺跡，14. 江尻南遺跡，
17. 下石瀬遺跡，18. 蓮花寺遺跡，
19. 古定塚遺跡，20. 入定塚遺跡，
21. 中川遺跡，

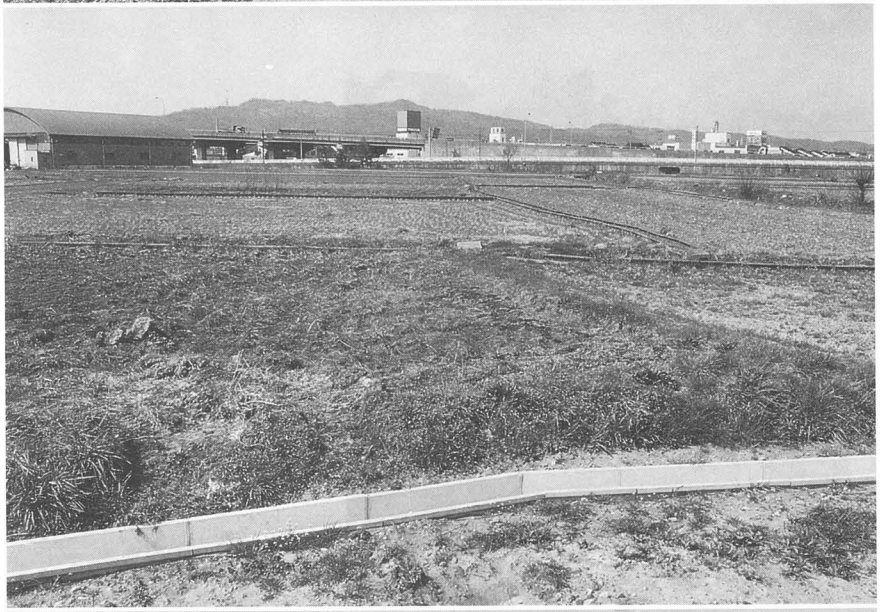
1．江尻Ａ遺跡（北）

2．江尻Ａ遺跡（南）



3．江尻Ｃ遺跡（西）

1．江尻南遺跡（北東）



2．江尻南遺跡（南）

3．向野本町遺跡（西）

1．下石瀬遺跡（南東）

2．蓮花寺遺跡（北西）

3．蓮花寺遺跡（南東）

1．入定塚遺跡（西）

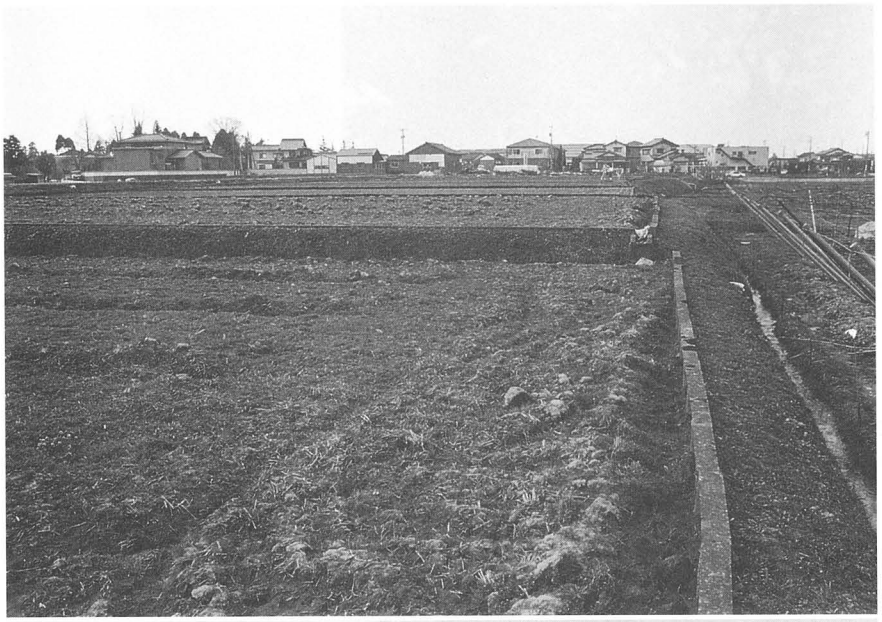
2．入定塚遺跡（南）

3．中川遺跡（西）

1．小竹藪遺跡（東）

2．高岡城遺跡（西）

3．大手口遺跡（北東）

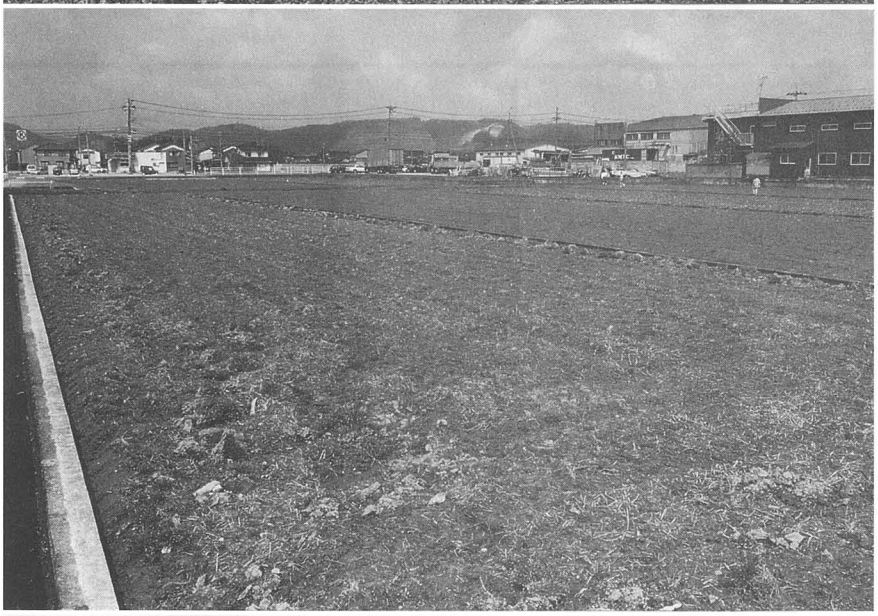


1．波岡北遺跡（北）

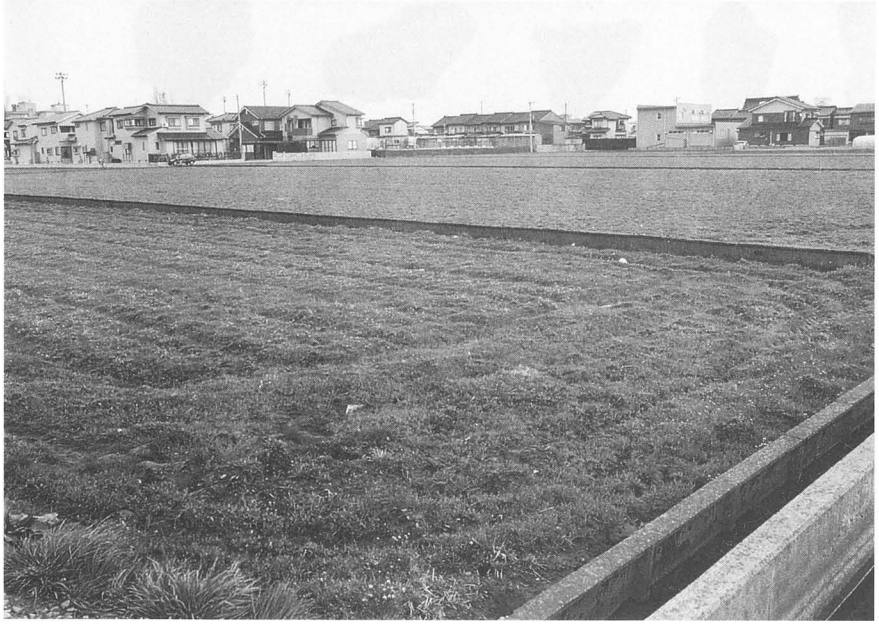
2．波岡北遺跡（南）

3．波岡東遺跡（北）

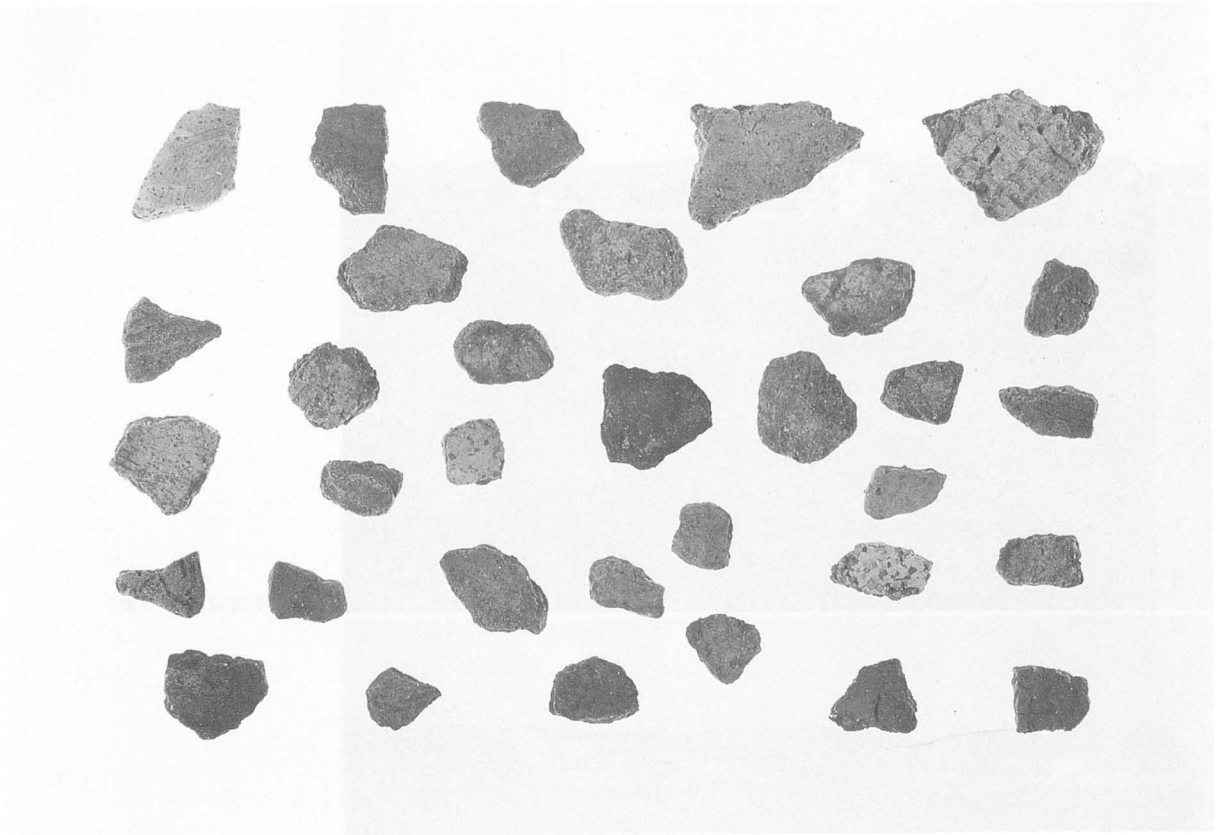
1．波岡南遺跡（南）



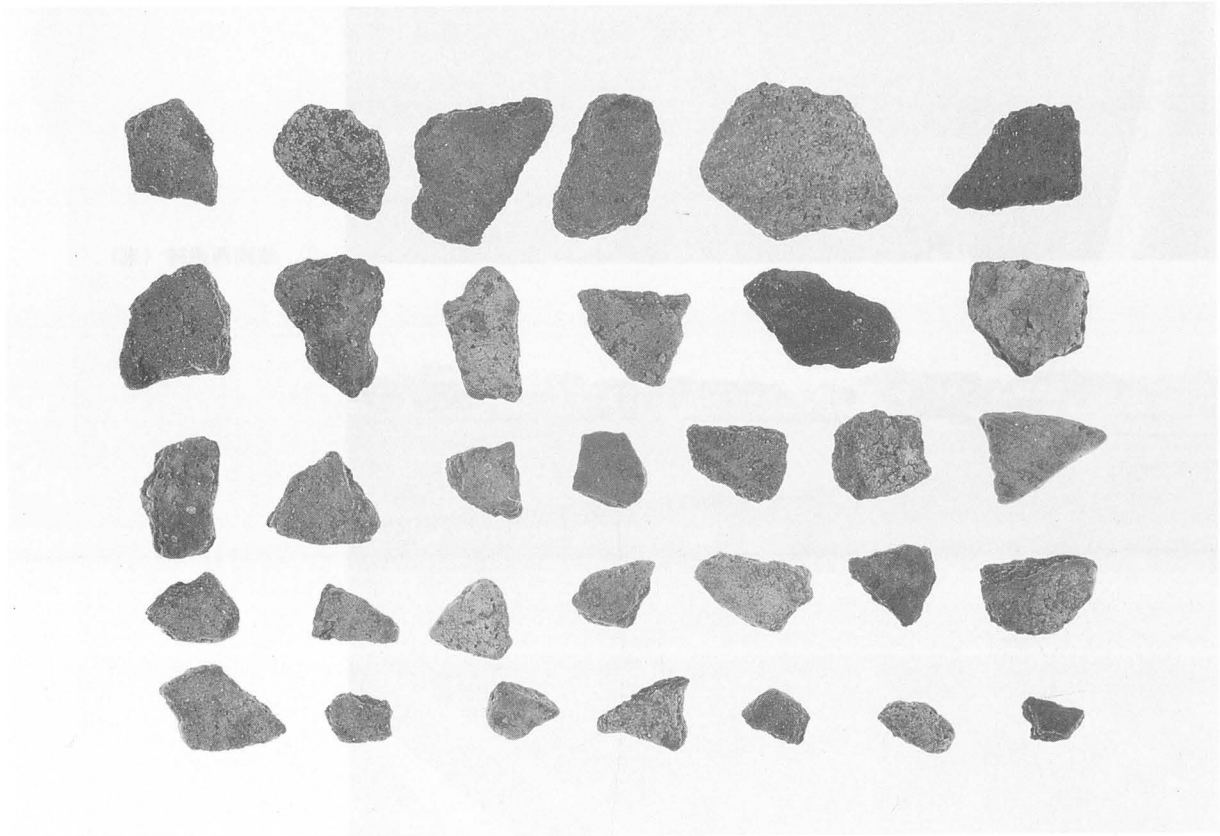
2．波岡西遺跡（東）



3．瑞穂町遺跡（南西）



1．江尻南遺跡出土縄文土器



2．江尻南遺跡出土縄文土器

高岡市埋蔵文化財調査概報第31冊
市内遺跡分布調査概報Ⅶ

発行者　高岡市教育委員会
富山県高岡市広小路7番50号

1996年3月29日

印刷所　小間印刷株式会社
富山県高岡市利屋町3